デザインの本意（原　研哉）

教科書 p.180〜p.186

検印

漢字

一 次の太字の仮名を漢字に改めよ。

1 ようと〔　　〕の広い製品。	p.180	ℓ.4
2 たんじゅん〔　　〕な仕掛け。	p.180	ℓ.4
3 造形ににぶ〔　　〕みがある。	p.180	ℓ.8
4 どう〔　　〕が長く足の短い犬。	p.181	ℓ.8
5 手帳をけいたい〔　　〕している。	p.181	ℓ.11
6 毛糸のちぢ〔　　〕れを直す。	p.181	ℓ.12
7 封筒に切手をは〔　　〕る。	p.182	ℓ.6
8 こうぶつ〔　　〕の結晶。	p.182	ℓ.9
9 期限をえんちょう〔　　〕した。	p.183	ℓ.15
10 自然のちつじょ〔　　〕。	p.184	ℓ.3
11 球技がじょうたつ〔　　〕する。	p.184	ℓ.6
12 文化がじゅくせい〔　　〕する。	p.184	ℓ.14
13 せいこう〔　　〕な球を作る。	p.184	ℓ.14
14 暮らしをけいはつ〔　　〕する。	p.185	ℓ.3
15 コップにすいてき〔　　〕がつく。	p.185	ℓ.5
16 川の流れにけんま〔　　〕された。	p.185	ℓ.7
17 富をちくせき〔　　〕する。	p.185	ℓ.13

二 次の太字の漢字の読みを記せ。

1 何の変哲〔　　〕もない形。	p.180	ℓ.2
2 水道の蛇口〔　　〕。	p.180	ℓ.4
3 湯が沸〔　　〕く。	p.180	ℓ.5
4 蓋〔　　〕に膨らみがある。	p.180	ℓ.8
5 幾何学〔　　〕的な模様。	p.180	ℓ.9
6 懐古〔　　〕趣味の流行。	p.181	ℓ.1
7 知恵の堆積〔　　〕。	p.181	ℓ.14
8 階段で昇降〔　　〕する。	p.182	ℓ.2
9 便箋〔　　〕を買う。	p.182	ℓ.5
10 結晶は造化〔　　〕の妙だ。	p.183	ℓ.10
11 運動に即応〔　　〕する。	p.183	ℓ.8
12 合理性に立脚〔　　〕する。	p.183	ℓ.10
13 他社に比べて品質が劣〔　　〕る。	p.184	ℓ.11
14 物理法則の表象〔　　〕。	p.184	ℓ.3
15 反復が形を育〔　　〕む。	p.185	ℓ.6
16 志〔　　〕を持って作る。	p.185	ℓ.11
17 経済の勃興〔　　〕。	p.185	ℓ.13

語句

一 次の太字の語句の意味を調べよ。

1 気づくということの中にデザインの本意がある。	〔　　〕	p.181 ℓ.9
2 自然界で実際に発現することは少ない。	〔　　〕	p.182 ℓ.9
3 球体の運動は物理法則の明快な表象だ。	〔　　〕	p.184 ℓ.3

二 次の語の対義語を答えよ。

1 演繹 ↔	〔　　〕	p.183 ℓ.8
2 普遍 ↔	〔　　〕	p.185 ℓ.7
3 必然 ↔	〔　　〕	p.185 ℓ.11

三 次の語句を使って短文を作れ。

1 何の変哲もない	〔　　〕	p.180 ℓ.1
2 目を奪う	〔　　〕	p.180 ℓ.10
3 時代がかった	〔　　〕	p.180 ℓ.11

要点の整理

◉次の空欄に本文中の語句を入れて、内容を整理せよ。

第一段落　柳宗理のデザインした薬缶…薬缶はこれに限る、と思わせる説得力に満ちている

（理由）〔ア　　〕の動作にきれいに寄り添っている

第二段落　デザイン…生み出す思想＋暮らしや環境の本質を考える〔イ　　〕の思想

↓作ると同時に、〔ウ　　〕ことの中にもデザインの本意がある

←

人間は世界を四角くデザインしてきた

（理由）四角＝最も身近な最適性能あるいは〔エ　　〕原理だった

第三段落　円もまた、人間が好きな形の一つ

円＝〔オ　　〕な幾何学形態

↓人間と世界の関係の中に合理性に立脚した〔カ　　〕の集積を築いていく基本

→

球体の運動＝物理法則の表象↓〔キ　　〕をすることで再確認してきた

↓完全な球体に近いボールが必要↓技術〔ク　　〕が向上↓球技の技能も高度化

第四段落　球と球技の関係＝物と〔ケ　　〕の関係

優れたデザイン…人の行為の普遍性を表象

↓デザイナーは暮らしを〔コ　　〕する、物の形の探求を目ざす

民芸…人の〔サ　　〕が暮らしの道具に形の必然をもたらしたもの

←

近代社会の成立↓志を持って形を作り〔シ　　〕をなすという着想＝デザイン

＊デザインによって、経済の勃興を目ざすだけでは得られない〔ス　　〕を作る

◉次の空欄に本文中の語句を入れて、全体の要旨を整理せよ。

デザインとは生み出すだけの思想ではなく、暮らしや〔ア　　〕の本質を考える生活の思想でもあるため、気づくことの中にもデザインの〔イ　　〕がある。優れたデザインは人の行為の〔ウ　　〕を表象しており、デザイナーたちは〔エ　　〕を啓発する物の形を探求してきた。近代社会の成立とともに人々が生み出した、〔オ　　〕を持って形を作り環境をなすという着想こそがデザインであり、〔カ　　〕の勃興を目ざすだけでは得られない豊かさを作るということである。

◉右を参考にして、要旨を百字以内にまとめよ。

第一段落（初め～p.181 ℓ.5）

一「日常の行為を……よくできている」（一八〇・6～7）を言い換えている部分を、本文中より二十字以内で抜き出せ。

二「用の美に徹する」（一八〇・8）とはどういうことか。次から選べ。
ア 人の用に過不足なく応えられる形の美しさを、徹底して追求するということ。
イ 美しさを犠牲にして、用途に応じた機能的な形のみを追い求めるということ。
ウ 使いやすさよりも、見ただけで用いたくなるような造形の美しさを重視するということ。
エ 過ぎ去った時代を思い起こさせるような、古い物の形の美しさを貫くということ。
〔　　〕

三「イタリア製の……感じられた」（一八〇・9～11）理由を、筆者はどのように考えているか。本文中の語句を用いて説明せよ。

四「懐古趣味」（一八一・1）と同意の語句を本文中から一語で抜き出せ。

五「目を三角に……平熱に戻って」（一八一・2）について、次の問いに答えよ。
1「目を三角にして」のここでの意味を次から選べ。
ア 目を白黒させて　イ 目を凝らして
ウ 血眼になって　エ 目を細くして
〔　　〕

第二段落（p.181 ℓ.6～p.183 ℓ.3）

2「少し平熱に戻って」とはどういうことか。説明せよ。

六「気づく」（一八一・8）について、次の問いに答えよ。
1 ほぼ同意の表現を、本文中から六字で抜き出せ。
2 何に「気づく」のか。二十五字以内で答えよ。

七 人間が「環境を四角くデザインした」（一八二・7）のはなぜか。本文中の語句を用いて三十五字以内で答えよ。

八「造化の妙」（一八二・10）の意味を次から選べ。
ア つくりの珍しさ　イ 形の美しさ
ウ 自然の見事さ　エ 人工の奇跡
〔　　〕

九「最先端のパソコンも携帯も、そのフォルムは古典的なのだ。」（一八二・16）というのはなぜか。次から選べ。
ア 直線や直角からなる四角は、二本の手を用いれば簡単に作り出せるから。
イ 四角は、人間が昔からさまざまなデザインに用いてきた身近な形だから。

第二段落

ウ 人間は四角のような、比較的簡単に具体化できる形によるデザインを好むから。
エ 人間は、デザインにおいては四角にこだわり、他の形に挑戦することを好まないから。
〔　　〕

第三段落（p.183 ℓ.4～p.184 ℓ.8）

十一「円もまた、人間が好きな形の一つである。」（一八三・4）とあるが、筆者はその理由をどのように考えているか。本文中の語句を用いて三十字以内で説明せよ。

十二「近代科学の発達と球技の発達は並行して進んできた」（一八四・2）とはどういうことか。次から選べ。
ア 人が自然の秩序や法則を知ったことから、ボールのリアクションも一定となったということ。
イ 球体の運動は物理法則の表象だと知って、人は球技を楽しむようになったということ。
ウ 完全な球体に近いボールがあって初めて、人は球技をするようになったということ。
エ 人は、発見した物理法則を、球体の運動である球技をすることで再確認してきたということ。
〔　　〕

十三「球と球技の関係は、物と暮らしの関係にも移行させて考えることができる。」（一八四・9）について、次の問いに答えよ。
1「球と球技の関係」において、球の精度が高くなるほど、球技はどうなるというのか。簡潔に答えよ。
〔　　〕

第四段落

第四段落（p.184 ℓ.9～終わり）

2「物と暮らしの関係」を説明している部分を本文中から四十字以内で抜き出し、初めと終わりの五字で示せ。
～

十四「形を見いだそうと努力する」（一八四・15）とあるが、ここでの「形」とはどのようなもののことか。本文中から十五字以内で抜き出せ。

十五「水流に身を任せて」（一八五・9）とはどのようなことをたとえたものか。次から選べ。
ア 近代科学の発展に逆らわずに、ということ。
イ 暮らしの営みの反復に委ねて、ということ。
ウ 暮らしや文化の熟成に合わせて、ということ。
エ デザイナーの努力に任せて、ということ。
〔　　〕

十六「僕らはボールを丸く作り得ているだろうか。」（一八五・15）とあるが、筆者はどのようなことを問いかけているのか。次から選べ。
ア 人の行為の本質に寄り添い、暮らしや文化を熟成させる形を見いだすことができているだろうか、という思い。
イ 暮らしや文化を熟成させていくうえで、デザイナーは何を目ざすべきなのだろうか、という思い。
ウ 長い暮らしの積み重ねの中で、優れた形を育むための努力が十分にできていただろうか、という思い。
エ 宇宙の原理を表象する、精度の高い球を作ることができているだろうか、という思い。
〔　　〕

城の崎にて（志賀直哉）

教科書 p.152 ～ p.162

検印

漢字

p.152 ℓ.4

一 次の太字の仮名を漢字に改めよ。

1 がまん〔　　〕できたらと思う。
2 きこう〔　　〕もよかった。
3 お互いにこうしょう〔　　〕もない。
4 きょうふ〔　　〕させない考え。
5 げきれい〔　　〕される。
6 静かなざしき〔　　〕だった。
7 蜂のす〔　　〕があるらしい。
8 羽やしょっかく〔　　〕や前足。
9 足をちぢ〔　　〕める。
10 小川がゆる〔　　〕やかに流れる。
11 人がさわ〔　　〕いでいた。
12 一生けんめい〔　　〕逃げる。
13 手術の用意をたの〔　　〕む。
14 死の恐怖におそ〔　　〕われない。
15 みちはば〔　　〕が狭くなる。
16 多少こわ〔　　〕い気がする。
17 流れにのぞ〔　　〕んでじっとする。

p.152 ℓ.2

二 次の太字の漢字の読みを記せ。

1 致命傷〔　　〕になった。
2 要心は肝心〔　　〕だ。
3 寂しい秋の山峡〔　　〕。
4 危〔　　〕うかった出来事。
5 妙〔　　〕な考え。
6 丁寧に調〔　　〕える。
7 欄干〔　　〕から眺める。
8 触角が垂〔　　〕れ下がる。
9 拘泥〔　　〕する様子がない。
10 雨どいを伝〔　　〕って流れる。
11 外界〔　　〕の変化。
12 ねずみの最期〔　　〕。
13 決まった運命を担〔　　〕う。
14 興奮から快活〔　　〕になる。
15 影響するに相違〔　　〕ない。
16 大きな桑〔　　〕の木。
17 しっぽを反〔　　〕らす。

語句

p.154 ℓ.4

一 次の太字の語句の意味を調べよ。

1 羽目のあわい。
　　
2 全く拘泥する様子はなかった。
　　
3 あひるは頓狂な顔をして。
　　
4 最期を見る気がしなかった。
　　

p.154 ℓ.11

p.156 ℓ.16

p.157 ℓ.1

二 次の空欄に適語を入れよ。

1 眼界から消えて〔　　〕もないときだった。
2 〔　　〕を伸ばしてきょろきょろとした。
3 全力を〔　　〕くして逃げ回る。

p.156 ℓ.1

p.157 ℓ.3

三 次の語句を使って短文を作れ。

1 一つ間違えば
　　

p.153 ℓ.6

2 いかにも
　　

p.154 ℓ.12

要点の整理

● 次の空欄に本文中の語句を入れて、内容を整理せよ。

第一段落	第二段落	第三段落	第四段落	第五段落	第六段落
初め～一五二・5	一五二・6～一五三・16	一五四・1～一五五・16	一五六・1～一五八・10	一五八・11～一六一・8	一六一・9～終わり
山の手線の電車に跳ね飛ばされてけがをした「自分」は、その〔ア〕のために城崎温泉へ出かけた。	城の崎での療養の中で、「自分」は死について思ったが、それは〔イ〕ではなく、「自分」の心は静まって、何かしら死に対する親しみが起こっていた。	ある朝、一匹の蜂が玄関の屋根で死んでいるのを見つけた。「自分」はその死骸の静かさに〔ウ〕を持った。「自分」は以前、主人公が妻を殺す小説を書いたが、今度は殺された妻の気持ちを主に、死の〔エ〕を書いてみたいと思った。	ある午前、散歩に出た「自分」は、首に魚串を刺され、子供たちや車夫に石を投げられているねずみを見た。懸命に逃げるねずみを見て「自分」は、死に到達するまでの〔オ〕を恐ろしく思い、寂しい〔カ〕気持ちになった。そして自身の事故を振り返るのだった。	ある夕方、小川に沿って歩いていたとき、驚かせようとして「自分」が投げた石が〔キ〕いもりに当たり、死んでしまった。電車の事故では「自分」は偶然死なかっただけで、死と生はそれほど〔ク〕が〔ケ〕ないことに思い至り、生き物の〔ケ〕を感じるのであった。	三週間滞在して、城の崎を去った。それから三年以上経つが、脊椎カリエスになるだけは助かった。

● 次の空欄に本文中の語句を入れて、全体の主題を整理せよ。

「自分」はけがの療養のために城崎温泉に出かけた。一つ間違えば死んでいたと思うと寂しいが、恐怖ではなかった。死んだ〔ア〕　　〕にはその〔イ〕　　〕に親しみを感じ、死の〔ウ〕　　〕から逃げようとしている〔エ〕　　〕からは、死に〔オ〕　　〕するまでの動騒の恐ろしさを感じた。自らが偶然〔カ〕　　〕を殺してしまったときには、生き物の寂しさを感じた。そして、これらの死から、生と死が〔キ〕　　〕にあるものではないと悟るのだった。

● 右を参考にして、主題を百字以内にまとめよ。

第一段落（p.152 ℓ.6～p.153 ℓ.16）

二「寂しい考え」（一五二・4）の具体的な内容が描かれている部分を本文中から抜き出して、初めと終わりの五字で示せ。

［　　］～［　　］

三「クライブがそう思うことによって」（一五三・13）とあるが、どのようなことを思ったのか。本文中から抜き出して、初めと終わりの五字で示せ。

［　　］～［　　］

三「クライブがそう思うこと」（一五三・13）に対して、「自分」は実際にはどのように感じているのか。簡潔に説明せよ。

［　　］

第三段落（p.154 ℓ.1～p.155 ℓ.16）

四「寂しかった。」（一五四・15）とあるが、誰（何）が「寂しかった」のか。次から選べ。

ア　死というものが　　イ　死んだ蜂が
ウ　「自分」の気持ちが　　エ　ほかの蜂が

［　　］

五「①それにしろ、②それはいかにも静かであった。」（一五五・7）とあるが、①②の「それ」がさしている内容を、それぞれ示せ。

①［　　］
②［　　］

六蜂の描写の鑑賞文として適当なものを、次から選べ。

ア　繰り返し蜂の死の静かさを強調することにより、死の無惨さを描き出している。
イ　蜂の死という事実に対してなんの同情も持たず、冷淡な態度で描いている。
ウ　生きている蜂と対比させながら、死んだ蜂の特徴を捉えて正確に描写している。
エ　巣の仲間に無頓着な蜂の姿を通して、死とはありふれたものだということを表現している。

［　　］

第四段落（p.156 ℓ.1～p.158 ℓ.10）

七語り手が「動作の表情」（一五六・11）と表現したのはなぜか。その理由を四十字以内で答えよ。

八「自分」が「寂しい嫌な気持ちになった」（一五七・3）のはなぜか。本文中の語句を用いて説明せよ。

九「あれが本当なのだと思った。」（一五七・3）とあるが、何が「本当」なのか。次から選べ。

ア　生物は命のある限り生きる努力を放棄してはいけないこと。
イ　動物は死ぬに決まった運命から逃れようと必死になること。
ウ　人間が動物のはかない生命に対して無慈悲であること。
エ　死からは極力目をそむけたいと願うこと。

［　　］

第四段落（p.156 ℓ.1～p.158 ℓ.10）

十「興奮から自分は非常に快活になった」（一五六・1）のはなぜか。本文中の語句を用いて説明せよ。

十一次の文章は、「『あるがまま』で、気分で願うところ」（一五六・7）を説明したものである。空欄に入る適当な語句を、それぞれ後から選べ。

あるがままに［　①　］ことが［　②　］状態であり、［　③　］ことに決まっている運命なら、ねずみのように全力で逃げまどうのではなく、［　④　］死にたいと願う気分。

（ア　生きる　イ　静かに　ウ　自然な　エ　死ぬ
オ　寂しく　カ　人間的な）

①	
②	
③	
④	

十二「そう実際にすぐは影響はしない」（一五六・8）とは、どういう意味か。次から選べ。

ア　自分は死の恐怖を克服できたと思っても、実際は一時にすぎず、再び死の恐怖に襲われるだろうということ。
イ　自分が死から逃れたいと切望しても、その願いは生き物の持つ宿命として実際的ではないということ。
ウ　自分が静かに死を迎えたいと思ったにしても、実際の局面では願いどおりになるものではないということ。
エ　自分は死に対して鈍感なので、実際は死の直前まで死の恐怖にとらわれることはないだろうということ。

［　　］

十三「その葉だけがいつまでもヒラヒラヒラヒラとせわしく動くのが見えた。」（一五六・2）とあるが、この桑の木の描写の部分は、小説の中でどのような役割を果たしているか。簡潔に説明せよ。

第五段落（p.158 ℓ.11～p.161 ℓ.8）

十四「生き物の寂しさ」（一六〇・14）とは、どのような寂しさか。わかりやすく説明せよ。

十五「実際喜びの感じは湧き上がってはこなかった。」（一六一・4）のはなぜか。その理由を述べた部分を本文中から五十字程度で抜き出し、初めと終わりの五字で示せ。

［　　］～［　　］

十六次の中から主人公の心情と合わないものを二つ選べ。

ア　電車に跳ね飛ばされた後、一つ間違えば墓地の土の下に寝ているところだったと思うと、寂しさと恐ろしさを感じていた。
イ　生きている蜂の忙しさと比べて死んだ蜂の持っている静かさに親しみを感じていた。
ウ　何とか生き延びようとして全力を尽くして逃げ回るねずみを見ていると、死に至る動騒を恐ろしいと感じた。
エ　投げた石がいもりに当たっていもりが死んでしまったとき、生命を弄んだことへの罪悪感を感じた。
オ　電車に跳ねられても死ななかった自分は、感謝しなくてはならないのだが、生も死もそれほど差のあるものとは思えなかった。

［　　］［　　］

グローバリズムの「遠近感」（上田紀行）

教科書 p.188〜p.194

検印

漢字

一 次の太字の仮名を漢字に改めよ。

1 しょうげき〔　　〕的な事件。（p.188 ℓ.2）
2 遠近感のそうしつ〔　　〕。（p.188 ℓ.7）
3 本土をこうげき〔　　〕する。（p.189 ℓ.10）
4 南北戦争をのぞ〔　　〕く。（p.189 ℓ.1）
5 東京大くうしゅう〔　　〕。（p.189 ℓ.4）
6 都市のしょうめつ〔　　〕。（p.189 ℓ.7）
7 土地がはかい〔　　〕される。（p.190 ℓ.2）
8 土地へのあいちゃく〔　　〕。（p.190 ℓ.7）
9 情報のりゅうつう〔　　〕。（p.191 ℓ.16）
10 とうし〔　　〕という形。（p.191 ℓ.1）
11 経済のしゅやく〔　　〕。（p.191 ℓ.4）
12 へいさ〔　　〕的な組織。（p.191 ℓ.10）
13 市場にさんにゅう〔　　〕する。（p.192 ℓ.1）
14 こうかん〔　　〕可能。（p.192 ℓ.3）
15 世界をみちび〔　　〕く。（p.192 ℓ.10）
16 しょうちょう〔　　〕だった。（p.192 ℓ.15）
17 世界のこうず〔　　〕。（p.193 ℓ.15）

二 次の太字の漢字の読みを記せ。

1 ビルを襲〔　　〕った。（p.188 ℓ.2）
2 紛〔　　〕れもない。（p.188 ℓ.5）
3 湾岸〔　　〕戦争。（p.189 ℓ.1）
4 灰燼と帰〔　　〕す。（p.189 ℓ.7）
5 ゲリラを一掃〔　　〕。（p.189 ℓ.13）
6 実存〔　　〕を支える。（p.190 ℓ.2）
7 強烈〔　　〕に感じる。（p.190 ℓ.5）
8 アメリカが主導〔　　〕する。（p.190 ℓ.8）
9 石油の備蓄〔　　〕量。（p.191 ℓ.13）
10 減少を補〔　　〕う。（p.191 ℓ.13）
11 金融〔　　〕の自由化。（p.191 ℓ.2）
12 国境に縛〔　　〕られる。（p.191 ℓ.3）
13 世界中の至〔　　〕る所。（p.191 ℓ.4）
14 バブル経済の崩壊〔　　〕。（p.191 ℓ.5）
15 システムの障壁〔　　〕。（p.192 ℓ.11）
16 時代が到来〔　　〕する。（p.192 ℓ.12）
17 情報を操作〔　　〕する。（p.192 ℓ.14）

語句

一 次の太字の語句の意味を調べよ。

1 土地が破壊され、**灰燼に帰す**。（p.189 ℓ.7）
〔　　〕
2 身の引き裂かれるような痛みに**茫然自失する**。（p.193 ℓ.12）
〔　　〕

二 次の空欄に後から適語を選んで入れよ。

1 ゲリラを〔　　〕しようと枯れ葉剤をまく。（p.189 ℓ.13）
2 技術的にはすでに他国に〔　　〕も二歩も先んじていた。（p.192 ℓ.11 p.189 ℓ.13）
3 巨額の富を生み出し、〔　　〕勝ちの状態であった。（p.193 ℓ.13）
4 〔　　〕にして破壊され地球の重力によって大地に落下した。（p.193 ℓ.6）
（一瞬　一歩　一掃　一人）

三 次の語句を使って短文を作れ。

1 ほかならない（p.193 ℓ.9）
〔　　〕
2 かけがえのない（p.192 ℓ.9）
〔　　〕

要点の整理

◉次の空欄に本文中の語句を入れて、内容を整理せよ。

第一段落　二〇〇一年九月一一日の〔ア　　〕的な事件＝「生きる意味」の〔イ　　〕
「遠近感」に直面させられる出来事
↓
アメリカにとっての戦争＝遠い出来事→〔ウ　　〕
⇔
日本人にとっての戦争＝東京大空襲・広島と長崎の原爆の体験→喪失感を知る
〔エ　　〕が喪失された情報

第二段落　資本主義の変化…モノの資本主義→カネと〔オ　　〕が流通する資本主義
＝
工業化社会から〔カ　　〕工業化社会へ→グローバル〔キ　　〕システム
＝
「遠近感」のないシステム
＝
〔ク　　〕の自由化 ―――→ 国際短期資本の瞬間的移動
世界中どの場所も等価なもの

第三段落　経済的には世界の各地が「〔ケ　　〕」になった
〔コ　　〕＝グローバル化の技術的な裏打ち
〔サ　　〕＝制度的な裏打ち
↓
アメリカの一人勝ちの象徴＝世界貿易センタービル
↓
9・11がえぐり出したもの→世界の〔シ　　〕そのもの
＝
グローバル資本主義のシステムの中にありながら、私たちが生きているのは、遠近感のある「〔ス　　〕」である

◉次の空欄に本文中の語句を入れて、全体の要旨を整理せよ。

大空襲や〔ア　　〕を知る日本人は戦争における「遠近感」を知っているが、アメリカ人は戦争を遠い地の出来事で、遠近感が〔イ　　〕された情報として接してきた。アメリカが遠近感を喪失したのは、〔ウ　　〕革命によるグローバル経済システムやカネと情報が〔エ　　〕する資本主義が成立したからである。しかし、9・11の〔オ　　〕事件により、グローバリズムの中に生きる人々の存在は〔カ　　〕不可能なもので、遠近感のある〔キ　　〕で生きていることに直面させられた。

◉右を参考にして、要旨を百字以内にまとめよ。

第一段落（初め〜p.190 ℓ.10）

一「『生きる意味』の戦争」（一八・5）とは、どのような戦争か。次から選べ。
ア　自国から遠く離れたところで起きている戦争。
イ　多くの生命とともに都市も消滅させてしまうような戦争。
ウ　自分自身の実存を支えているものが何かを感じさせる戦争。
エ　グローバリズムという仕組みの中で起こる戦争。
〔　　〕

二「アメリカにとっては、『遠近感』を喪失した世界」（一八・6）「日本人は戦争における『遠近感』を知っている。」（一九・5）とあるが、アメリカと日本の違いを本文中の語句を用いて説明せよ。

アメリカ＝遠近感を〔ア　　〕していた一度も〔イ　　〕を〔ウ　　〕されたことがない。〔エ　　〕から遠く離れたところでの〔オ　　〕。〔カ　　〕地の出来事として見ている。	日本＝遠近感を知っている東京〔キ　　〕で焼き尽くされた。広島と長崎に〔ク　　〕が投下された。自分が生まれ育った〔ケ　　〕が破壊され、すべてを失うショックを知っている。

三　日本人も「現地の人々が感じるであろう悲しみと喪失感にはほとんど気づいていなかった」（一九・10）のはなぜか。本文中の語句を用いて十五字以内で答えよ。

四「その土地への『愛着』が実存を支えている」（一九・2）とはどういうことか。次から選べ。
ア　遠い土地での戦争も国際的には重要な情報であるということ。
イ　生まれ育った土地の記憶が自分の存在を形作っているということ。
ウ　自分の土地以外でも都市の破壊は悲しみを生み出すということ。
エ　異なる土地で暮らす人も自国への愛は共通しているということ。
〔　　〕

第二段落（p.190 ℓ.11〜p.192 ℓ.2）

五「アメリカという国家の問題」（一九・8）を端的に言い表した一文を、本文中から抜き出せ。

六「アメリカが主導するグローバリズム」（一九・8）とはどういうものか。端的に言い表した部分を、本文中から十二字で抜き出せ。

七「工業化時代の資本主義」（一九・11）に当てはまるものを、次から選べ。
ア　モノが動いていく資本主義。
イ　カネと情報が動いていく資本主義。
ウ　国境に縛られることなく自由に資金が動く資本主義。
エ　マウスのクリックだけで投資ができる資本主義。
〔　　〕

八「それ」（一九・1）の指示内容を本文中から十字以内で抜き出せ。

九「マウスのクリックだけでできる」（一九・7）とはどういうことをたとえたものか。本文中の語句を用いて二十五字以内で説明せよ。

第二段落（p.190 ℓ.11〜p.192 ℓ.2）

十「日本市場が閉鎖的」（一九・10）だったとあるが、どういう状態であったと考えられるか。説明せよ。

十一「グローバル経済システム」（一九・10）の特徴を言い表した部分を、本文中から二十五字以内で抜き出せ。

十二「世界中のどの場所も等価なものとなる」（一九・2）とはどういうことか。言い換えた部分を本文中から二十字以内で抜き出せ。
こと。

十三「グローバル化の技術的裏打ち」（一九・7）とは、どういうことか。次から選べ。
ア　IT革命が世界中を自由かつ瞬間的に、情報と資本を動かすようになったということ。
イ　IT革命が進んだことで、アメリカは工業化社会における富を継続的に得ることができたということ。
ウ　IT革命によって、世界の各国はモノとカネが流通する新しい資本主義を確立したということ。
エ　IT革命は、世界の経済に影響を与える交換不可能な特定の場所を作り上げたということ。
〔　　〕

第三段落（p.192 ℓ.3〜終わり）

十四「世界貿易センタービルが攻撃されて明らかになった」（一九・1）のは、どういうことか。次から選べ。
ア　世界貿易センタービルで働く人々は常に入れ変わっていて、変化しているということ。
イ　世界貿易センタービルは、均質な世界空間に存在しているので、攻撃後にすぐに復興できるということ。
ウ　世界貿易センタービルへの攻撃によって失われた生命は、かけがえのないものであったこと。
エ　世界貿易センタービルは地球の重力によって落下し、瓦礫となるべき物体であったこと。
〔　　〕

十五「9・11がえぐり出した」（一九・15）世界の構図において、筆者は結論としてどういうことを主張しているのか。本文中の語句を用いて五十字以内で説明せよ。

要点の整理

土佐日記（門出）

教科書 p.280〜p.282

検印

●次の空欄に適語を入れて、内容を整理せよ。

第一段落	初め〜二八〇・1	執筆の意図	男が書く〔ア　　〕というものを、〔イ　　〕の私も書いてみようと思う。
第二段落	二八〇・2〜二八〇・7	門出 親しい人々との別れ	ある年の十二月二十一日、午後〔ウ　　〕ごろ出発する。その〔エ　　〕を、簡潔に記す。ある人が土佐の国司の任期を終え、〔オ　　〕引き継ぎも済み、〔カ　　〕を受け取って乗船予定地へ移る。親しい人々がつめかけ、見送りをする。別れづらく思い、一日中〔キ　　〕するうちに、夜が更けた。
第三段落	二八〇・8〜二八〇・10	藤原のときざねの餞別	二十二日。海路の〔ク　　〕を祈願する。藤原のときざねの〔ケ　　〕の宴があり、みな酔いしれる。
第四段落	二八一・1〜二八一・9	八木のやすのりの餞別	二十三日。八木のやすのりが、〔コ　　〕をしてくれた。〔サ　　〕のある者は、他人の見る目など気にせずに、別れの挨拶に来た。
第五段落	二八一・10〜終わり	国分寺住職の餞別	二十四日。講師が餞別に来られた。〔シ　　〕を問わず、〔ス　　〕までが酔って遊び興じた。

語句・文法

一 次の語の意味を調べよ。

1 戌の時〔　　〕 p.280 l.2
2 ののしる〔　　〕 p.280 l.7
3 むまのはなむけ〔　　〕 p.280 l.9

二 次の太字の助動詞の意味をあとのア〜エからそれぞれ選び、活用形を書け。

1 男もすなる日記〔　　〕 p.280 l.1
2 するなり。〔　　〕 p.280 l.8
3 船路なれど、〔　　〕 p.281 l.3
4 あらざなり。〔　　〕 p.281 l.6
5 見えざなるを、〔　　〕 p.281 l.8

ア 断定　イ 存在　ウ 伝聞　エ 推定

三 次の太字の「し」は、あとのア〜オのいずれにあたるか。それぞれ選べ。

1 女もしてみむとて、するなり。〔　　〕 p.280 l.1
2 とかくしつつ、ののしるうちに、〔　　〕 p.280 l.7
3 むまのはなむけしたる。〔　　〕 p.280 l.4
4 国人の心の常として、〔　　〕 p.280 l.5
5 ものによりてほむるにしもあらず。〔　　〕 p.280 l.8
6 むまのはなむけしに出でませり。〔　　〕 p.281 l.10

ア サ行変格活用動詞「す」の連用形
イ サ行四段活用動詞の連用形活用語尾
ウ 過去の助動詞「き」の連体形
エ 接続助詞「して」の一部
オ 副助詞「しも」の一部

内容の理解

第一段落　第二段落　第三段落

一「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり。」（二八〇・1）について、次の問いに答えよ。

1 (A)「すなる」、(B)「するなり」の口語訳として適当なものを、それぞれ次から選べ。

ア 書いてみよう　イ 書くと聞いている
ウ 書くのである　エ 書くにちがいない
オ 書いたものだろうか

(A)〔　　〕(B)〔　　〕

2 この冒頭の一文から、作者が女性の立場に立ってこの日記を書こうとしていることがわかる。そのことが最もよくわかる叙述を、八字以内で抜き出せ。

二 この「門出」の記事には、第一段落の「すなる」「といふもの」といった表現がよく示しているように、女性の筆として、事実をぼかした表現が多く見られる。次の文章の中から、事実をぼかした表現を二つ抜き出せ。

それの年の十二月の二十日余り一日の日の戌の時に、門出す。そのよし、いささかにものに書きつく。（二八〇・2）

〔　　〕〔　　〕

三 (A)「和泉の国までと、平らかに願立つ。」（二八〇・8）と、(B)「平らかに和泉の国までと、願立つ。」とは、どのように違うか。(A)(B)の説明として適当なものを、それぞれ次から選べ。

ア 和泉の国が終着点になってしまう。
イ 「和泉の国に着くまではせめて」という気持ちである。
ウ 土佐の国から都までの道のりの長さを表す。
エ 平安無事への不安感がなくなる。

(A)〔　　〕(B)〔　　〕

第五段落　全体

四 「ありとある上・下」（二八一・11）とは、どういう意味か。次から選べ。

ア 身分の上の人も下の人も
イ 部屋の上座の人も下座の人も
ウ 裕福な人も貧しい人も
エ 背の高い人も低い人も

〔　　〕

五 本文中に、作者が自賛している文がある。挿入句（説明句）を含めたその一文を抜き出し、初めの十五字を書け。

六 次の1〜3の諧謔（滑稽）表現に該当するものを、それぞれ本文中から抜き出せ。

1 言葉の対照によるおかしみを表したもの。
2 言葉の矛盾によるおかしみを表したもの。
3 掛詞的に言葉を用いて洒落によるおかしみを表したもの。

1〔　　〕　2〔　　〕　3〔　　〕

七 作者は、女性の立場に立ってこの日記を書いている。その意図として適当でないものを、次から選べ。

ア 受領階級という社会的身分から解放された立場で書こうとした。
イ 女性の用いる仮名文字を自由に使って日記を書こうとした。
ウ 女性の立場をとることで自由な人物批評を行おうとした。
エ 女性らしい繊細で優美なみやびの世界を描こうとした。

〔　　〕

土佐日記（帰京）

教科書 p.285〜p.286

検印

●次の空欄に適語を入れて、内容を整理せよ。

第一段落	初め〜二八五・6	すさんだ家と人の心への憤慨	京の地に足を踏み入れてうれしい。わが家に到着して門に入ると、月が明るいので、様子がたいそうよく見える。〔ア　　〕に聞いていた以上に、ひどく〔イ　　〕いたんでいる。預けておいた人の〔ウ　　〕も、家と同様にすさんでいるのであった。一つ〔エ　　〕みたいなものだと、先方が望んで預かり、〔オ　　〕のあるごとにお礼の品も絶えず取らせていたので、人々は〔カ　　〕するが、声高に言わせず、〔キ　　〕だけはしようと思う。
第二段落	二八五・7〜二八六・1	亡き女児への追慕	池みたいに〔ク　　〕で、水がたまっている所がある。そのほとりにあった〔ケ　　〕も、一部はなくなっていて、全体的に荒れているのであった。そこに生えている〔コ　　〕を見るにつけ、土佐で亡くした〔サ　　〕を思い出し、悲しみに堪えきれず、互いに気持ちの通じ合う人と歌をよみかわした。
第三段落	二八六・2〜終わり	結び	忘れがたく、〔シ　　〕ことも多いが、書き尽くすことができない。いずれにせよ、こんなものは早く〔ス　　〕捨ててしまおう。

語句・文法

一 次の語句の意味を調べよ。（p.285 l.2）

1 こぼる〔　　〕
2 たより〔　　〕（p.285 l.4）
3 こころざし〔　　〕（p.285 l.6）
4 かたへ〔　　〕（p.285 l.8）
5 いかがは〔　　〕（p.285 l.11）

二 次の語句を単語に分け、文法的に説明せよ。

1 千年や過ぎにけむ、（p.285 l.8）
2 くちをしきこと多かれど、（p.286 l.2）

三 次の太字の助動詞の意味と活用形を書け。

1 荒れたるなりけり。〔　　〕（p.285 l.2）
2 生まれしも〔　　〕（p.285 l.13）
3 見ましかば〔　　〕（p.286 l.1）
4 とく破りてむ。〔　　〕（p.286 l.2）

第一段落

一 「家に預けたりつる人の心も、荒れたるなりけり。」（二八五・2）について、次の問いに答えよ。

1 「人の心も」とあるが、ほかに何が「荒れたるなりけり」か。そのものを、本文中の語で答えよ。〔　　〕

2 この一文は、〔　　〕と表現して、助詞の使い方一つで人の心の頼みがたいことを巧みに表した諧謔（滑稽）表現と考えられる。空欄に該当する言葉を、一文節で抜き出して書け。〔　　〕

3 第二段にも諧謔表現が二箇所ある。その箇所を抜き出し、それぞれ初めと終わりの三字で答えよ。

〔　　〕〜〔　　〕
〔　　〕〜〔　　〕

二 「中垣こそあれ、」（二八五・3）とあるが、口語訳する場合、次にどのような言葉を補ったらよいか。次から選べ。

ア だから　イ そして
ウ しかし　エ ところで

〔　　〕

三 「さるは、たよりごとに、ものも絶えず得させたり。」（二八五・4）について、次の問いに答えよ。

1 「さるは」とは、どのような意味か。次から選べ。

ア 望んで預かったのだが　イ 預かってくれたのは
ウ 預かってくれたわけは　エ 預かってくれたものだから

〔　　〕

2 「得させたり。」とあるが、どのような人に「得させたり。」というのか。本文中の語句を抜き出せ。

第二段落

四 「今宵、かかること。」と、声高にものも言はせず。」（二八五・5）について、次の問いに答えよ。

1 「かかること」とは、どのような事柄か。本文中からそれを言い表している一文を抜き出し、初めと終わりの三字で示せ。

〔　　〕〜〔　　〕

2 「声高にものも言はせず。」とあるが、(A)誰が、(B)誰に、言わせないのか。それぞれ次から選べ。

ア 隣家の主人　イ 従者　ウ 女児
エ 心知れる人　オ 作者

(A)〔　　〕(B)〔　　〕

五 「生まれしも……」（二八五・13）の歌について、次の問いに答えよ。

1 「小松」は何を暗示しているか。本文中から十二字以内で抜き出せ。

〔　　〕

2 「小松」は「悲しさ」を呼び起こす契機となっているが、この「悲しさ」をさらにつのらせる光景を、本文中から十五字で抜き出せ。

〔　　〕

六 「見し人の……」（二八六・1）の歌には、どのような心情が表れているか。次から選べ。

ア 松の永遠性をうらやましく思っている。
イ 人の心の頼みがたさを残念に思っている。
ウ 子を失った悲しみに深く沈んでいる。
エ 遠く離れた土佐の人々を懐かしんでいる。

〔　　〕

要点の整理

先従レ隗始

教科書 p.342〜p.343

検印

●次の空欄に適語を入れて、内容を整理せよ。

昭王の願い	郭隗の助言
〔ア〕の国の人々は噲の太子である〔イ〕を主君とした。これを昭王という。昭王は〔ウ〕を招こうとした。	
〔エ〕の国は〔オ〕の国が乱れているのにつけこんで、攻撃した。〔カ〕を招いて、国事は小国で〔キ〕に復讐することができない。そこで、〔ク〕を招いて、国事を相談し、〔ケ〕である噲の恥辱をすすぎたい。師事するのにふさわしい人物を教えてほしい。	古の王に、涓人に〔コ〕を持たせて〔サ〕の馬を求めさせる者がいた。ところが涓人は、〔シ〕馬の骨を五百金で買って帰ってきた。怒った王に、涓人は、〔ス〕馬の骨でさえ五百金で買うのだから、まして生きている馬ならなおさら高く買うだろうと考えて、〔セ〕の馬は今にやってくるでしょう。」と言った。まる一年もたたないうちに〔ソ〕の馬が三頭集まった。〔タ〕を招こうと願うなら、まず私を重用しなさい。そうすれば、私よりも賢い人たちはどうして千里の道を遠いと思うでしょうか。千里の道を遠いと思わずにやってくるでしょう。
昭王は〔チ〕のために新たに邸宅を作り、先生として敬い仕えた。そこで、〔ツ〕は先を争って〔テ〕に駆けつけた。	

語句・句法

p.342 l.5

一 次の語の読み(送り仮名を含む)と意味を調べよ。

1 以つて ／ ／

2 因る ／ ／

3 足る ／ ／

4 雪ぐ ／ ／

5 是に於いて ／ ／

p.343 l.7 l.7 l.6

二 次の文を書き下し文に改めよ。

1 使ニ大夫二人往テ先一焉。 ／

2 庸人尚羞レ之。況於ニ将相一乎。 ／

3 霜葉紅ニ於二月花一。 ／

4 豈ニ望レ報乎。 ／

第一段落

三 昭王は何のために「弔レ死問レ生、」(三四・4)ということをしたのか。次から選べ。

ア 戦争後の生存者数を知るため。
イ 新しい王として民衆の心をつかむため。
ウ 父をはじめとする祖先の霊を祀るため。
エ 敵国の斉に対して報復を誓うため。

二 「報」(三四・6)とあるが、何に報じるのか。次から選べ。 〔 〕

ア 斉国 イ 戦死者 ウ 賢者 エ 燕国

三 「先生」(三四・7)とは、誰のことか。本文中から二字で抜き出せ。(訓点不要。)

四 「之」(三四・8)とは、何をさすか。次から選べ。

ア 千里の馬を手に入れるための方法を教えてくれる人。
イ 先王が恥をかいた詳しい事情を説明してくれる人。
ウ 先生が死んだ事情をよく知っている人。
エ 恥を晴らすために共に政治を行うにふさわしい人。

第二段落

五 「古之君」(三三・1)から始まるたとえ話はどこまで続いているか。本文中の該当部分の終わりの三字を抜き出せ。(訓点不要。)

六 涓人が「買ニ死馬骨五百金一而返。」(三四・3)ということをしたのはなぜか。次から選べ。

ア 骨にさえ大金を出したという噂で、千里の馬は自然と集まるから。
イ 千里の馬と言っても、肝心の骨がなければ役には立たないから。
ウ 千里の馬を大金で買えば、馬を育てようとする人が増えるから。
エ 死馬の骨を砕いて飼料に混ぜると、名馬が育つから。 〔 〕

七 「士」(三四・6)・「隗」(同・7)は、たとえ話の部分ではそれぞれ何にあたるか。本文中からそれぞれ三字で抜き出せ。(訓点不要。)

士 ／ 隗 ／

八 郭隗が「先従レ隗始」(三四・6)と言った理由は何か。次から選べ。

ア 自分は賢者であるが、凡人のようにへり下って言えば、昭王はきっと自分を採用してくれるだろうから。
イ 自分を優遇せよと言えば、昭王はあつかましいやつだと軽蔑して、本当の賢者を捜すことを決心するだろうから。
ウ 自分のような取るに足りない人物が重用されれば、その噂を聞きつけて賢者が集まってくるだろうから。
エ 自分のような賢者を採用すれば、諸国でくすぶっている賢者が噂を聞いて集まってくるだろうから。 〔 〕

九 ①「昭王為レ隗改築レ宮、師ニ事之一。」(三三・7)・②「士争趨レ燕。」(同・8)は、たとえ話の部分ではどの文に相当するか。本文中からそれぞれ一文を抜き出せ。(返り点・送り仮名不要。)

① ／ ② ／

十 「先ず隗より始めよ」という故事成語の、①本来の意味と、②現在使われている意味を、それぞれ答えよ。

全体

① ／ ② ／